

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認証第六二七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十五年十二月二日発行(第百六巻第十二号)



旬日記 汀子

平成十四年十二月一日 関西野分会

朝の雨幹光らせて冬木立
書き上げて夕餉のおでん冷めてをり
明るさを庭に広げて冬木立

十二月一日 下萌旬会

富士のせてうすうすと冬霞かな
ただ木の葉時雨に立ちて惚ぶのみ
面影の消ゆることなく冬霞
重き空より軽々と木の葉雨
もたらせし剪りしばかりの冬の菊

十二月三日 有恒倶楽部

年忘とて忘れ得ぬ人のこと
散紅葉動くは水面なりしかな
静の池動の水音散紅葉
紅葉とは木の間隠れに色重ね
名園の迷路の如く縫ふ紅葉

十二月三日 無名会

冬晴の心前向きなりしかな
山荘の視界に枯野越しの富士
鳥鳴きて枯野明るき日をこぼす
滞在の三日の自炊きざみ葱
みそ汁に欠かせぬ葱でありにけり
きざみ来し葱の匂ひの抜けぬ指
人悼み 枯野の果に心置く

十二月三日 日本伝統俳句協会関西支部忘年会

歳晚の街を運転して着きぬ
人悼む心の寒さ抱き来し
稿債を忘るることも年忘

十二月四日 荇屋ケーブルテレビ放映の為

透明な影置き初めし初日かな
十二月七日 荇屋ホトギス会

しばらくは庭師たのまぬ落葉かな
昆陽池の白鳥も又なじむ日々
階段を見つ短日の喫茶店

十二月十日 大阪倶楽部

東京は初雪と聞き受話器置く
霜枯の野に咲けるもの日当れり
模様替したくなりたる師走かな
喪心に惚ぶ誰彼冬籠
初雪を遠きものとし聞いてをり
寄鍋にわが家の隠し味ありぬ

十二月十日 綿業倶楽部

根深汁より取り戻す元氣かな
根深汁炊きて遠き子思ひけり
顔見世の夜の部果てし人通り
十二月十一日 ラジオ深夜便のため
未知といふ未来へ年の改る

十二月十二日 清交社

湯豆腐の湯気に消えたる東山
湯豆腐の葉味に工夫ありにけり
波が消す千鳥の跡の渚かな
朝の日を返し群れ翔ぶ千鳥かな
模様替するはずなほち年用意
帰り来る子の部屋を先づ年用意
片付けることよりはじめ年用意
簡単にいつもの如く年用意

十二月十三日 工業倶楽部

冷たき手心は別と言ひ乍ら
触れしノブ冷たき朝の旅立に
眠る山より風の日となりにけり

十二月十八日 夏潮旬会

減量を守ると焼諾すすめても
尽したる落葉掃かや葛湯をしまひけり
反古ふえてゆく葛湯を残り乍ら
片づけし書齋稿債債残き冬
冷めたかも知れぬ焼諾すすめけり
芒刈り終へて移植の心組み

十二月十九日 深新会

冬霧に城消えさうに暮れさうに
冬の雨木の都を濡らしけり
隣席は耳鼻科の医師咳込めり
冬霧の呪縛口ビーンに解きけり

十二月二十一日 時雨会

帰り来る子等に空けおく冬座敷
又彼を惚ぶ話題に冬の雨
檜の屋間も見えたるてふ話題
幸せを呼ぶふくろふと聞きしより
人悼み冷たき雨の宵となる
彼のことが話せば淋し寒かりし

十二月二十二日 野分会

又同じものが残りしおでんかな
もう富士を隠さぬ萩の冬木立
枝ぶりをこまごま見せて冬木立

十二月二十三日 ロイヤル吟行会

枯色の中に展げてゆく湖面
見えて来る琵琶湖の冬の明るさよ
鴨飛んで湖に紛るることもして
誰がために渋柿の木と名付けしや
湖ほとり少し冷たき日和かな
眼つむればがたんたの冬ぬくし
十二月三十一日 悼 堀恭子様御夫君
日溜りの葉裏に蝶の凍ててをり

義 姉 稲畑汀子

義姉の体調が良くないと聞いてはいたが、入院している東京の病院へ見舞う時間がなかなか取れなかった。私は消息だけは聞きながら一喜一憂する日が続いた。

鎌倉に住んでいた義姉は姑の遺産として貰った芦屋の土地を隣に住んでいる私に買って欲しいとことある毎に言ってきた。

「欲しいけど無い袖は振れないわ」

と私は言いつづけていた。バブルが崩壊して地代が至る所で安くなっているのを知った。姉の土地は一部分が売れたが百七十坪ほどが売れ残っていると聞いていた。ある日その土地の世話を頼まれている甥の誠三がやって来てその百七十坪ほどを買って欲しいと義姉の言伝てを伝えた。

「汀子おばちゃまがずっと前から虚子記念文学館を創りたいと言っているんですけど、この土地でどうですか。和子おばちゃまが是非勧めると言っていましたよ」

「じゃあ、一度にお払い出来ないから残りの金額を五年かかかってお返しするのでよかったですら何とかするわ」

「それでは、僕が鎌倉の和子おばちゃまにお願いしてみます」

私はそう言ったものの清水の舞台の二倍ほど高い所から飛び降

りる気持ちで逡巡しながらようやく決心したのであった。私の子供たち三人とももう自立しているし、私の収入を計算してみてもとか年間の借りが返せると思った。私が病気になるって収入が無くなったら廣太郎が続けて払うという念書も入れた。

これからの五年間が途方もなく長く感じられた。思い切つて虚子記念文学館の設立を決心したとき私はもう一度清水の舞台から飛び下りるような気持ちで「ホトトギス」と日本伝統俳句協会の「花鳥調詠」に発表することにした。大勢の方々がそれを待っていたように協力して下さった。しかし私が抱えている義姉への借金とそれとははっきり区別して行かなければならなかった。身体をいといながら、毎年三月になると銀行に大金を振り込んで何年と数えていた。いよいよ建物が建ち上がって資料が揃った頃に兵庫県から財団法人の許可を頂いた。

「この土地を寄付するのだけと残りの借金も県に寄付することは出来ないかしら」

という私に、誠三は笑って、「借金はいらぬさうだよ」

とすげなく言うのであった。

「じゃあ、がんばらなくっちゃ」

あと二年になっていた。あとの二年は瞬く間に過ぎてようやく払い終るとほっとした。

「汀子さん。本当にありがとう。とっても助かったわ。鎌倉の家を修理してすっかり見違えるようになったのよ」

鎌倉の義姉から喜びの電話を貰った。

「一度、虚子記念文学館に伺わせて頂くわ」

とも言っていたがその頃から義兄が弱り始めて義姉は家を空けるわけには行かないと言つて来た。

県に寄付した土地の固定資産税や虚子記念文学館の建物、収蔵品に対する無税の許可証が国税局から送られてきたのはつい最近のことである。真面目に着実にやって来て本当によかったと安心した。義姉が元気な時に借りたものを返すことが出来たことも本当によかった。

「和子さんが亡くなられたのよ」

五月末、句会と講演の会を済ませて芦屋へ帰つて来た私は、ほつと思つく間もなく義姉の訃報を受け取つた。ともかくお悔やみに伺つて感謝の気持を伝えたいという思いが胸に溢れて来た。

次の朝鎌倉へと発つことにした。朝の関西野分会は後から選句をすればいいだろうと黒川悦子さんに電話をしてお断りをした。

東京で私がいつも頼んでいる個人タクシীর福井さんに電話して送り迎えを頼んだ。飛行機の切符も手に入った。

羽田空港から鎌倉への高速道路はよく空いていた。何度か訪ねたことのある義姉の家は何時も虚子忌や年尾忌に行く道の少し左へ入った雪の下という所ですぐに分つた。

「汀子おばちゃま、色々お世話になりました。お陰でこんなに綺麗になつて、住み心地もよいと両親も喜んでいたのです」

「私こそ、五年もかかつてようやくお返しすることが出来て、長い間本当にありがとうございます」

長男の和彦が案内してくれた部屋に義姉はやすらかに眠つてた。

「和子姉様ありがとうございました」

優しい義姉であった。虚子記念文学館を見て貰えなかったのが残念であった。

「今夜のお通夜に残れなくてごめんなさい。廣太郎がお伺いすると言つてました」

「お忙しいのに汀子おばちゃまありがとうございます」

外は細い雨が降っていた。待つて呉れていたククシーに乗り込むと一路羽田空港に向つた。

午後二時の下萌句会には充分間に合う時間に帰路の飛行機は羽田空港を離陸した。

廣太郎句帳

廣太郎

十二月十二日 土筆会

又一人若きが召され十二月

十二月十九日 登高会

虚子句碑のの字を消して雪しまく

早世を悼む心に十二月 顔見世や片岡仁左衛門何処

冬座敷彼と最後の思ひ出も 白鳥の航空母艦めく水面

十二月十三日 オペラ「ドン・カルロ」観劇

枯葎引けば乾きし音色かな

暮早し訃報の電話受けてなほ

七色の声七色の寒灯下 枯葎踏んで献花の列に入る

俳諧の危機を語りておでん酒

十二月十七日 草木瓜会

白鳥の羽縛きてよりパドゥ・トロワ

十二月四日 一水会

冬ざるゝ風に表情ありにけり 枯葎より猫の顔現れし

短日の帰宅待つ妻角生やし

年の市通り過ぎては又戻り 白鳥の尻がワルツを奏でをり

湯ざめして電話の訃報聞いてをり

空の色雲の疾さに冬ざるる 十二月二十四日 若水会

十二月五日 蕉心会

年の市世相反映してをりぬ 雪晴の都心渋滞麻痺転倒

炭ついで炉中宇宙となりにけり

冬ざれや大地の鼓動確とあり 聖夜劇村人Aの役は吾子

影絵めく高層ビル群冬霞

冬ざるる君の言の葉聞きしより 雪晴の越の日差に射抜かれて

航跡の冬濤となる巨船かな

十二月十八日 三番町句会

雪晴の星と対話をしてをりぬ

師の影は三步できかぬ冬日かな

単線の各駅停車雪しまく 冬蓄敷若き遺影は微笑めり

薦紅葉日裏日表確と見せ

鳩のごとく夜の銀座をさ迷へり クリスマスキャロルに寝息静かな子

この橋を結界として都鳥

息白き別れ話は常のこと 雪晴の地層露に遺跡かな

紅葉黄葉机上天魅羅まで紅葉

暮早し妻より先に寝れぬ夫

雑詠 汀子選

三瓶野の俄かに暗みほとゝぎす 姫路 桑田青虎
 都草角の海鳴り挽歌とす 同
 摘みくれし角の防風も思ひ出に 同
 水尾すぐに泡となりゆく涼しさよ 東京 稲畑廣太郎
 子等が来て蟻が来て甘いものがある 同
 夏袴きらと実朝失せにけり 同
 白靴や東京は土黒き街 神戸 長山あや
 水中花水の命を咲かせけり 同
 この墓に入らぬと決めし墓洗ふ 同
 満ち足りし家路となりぬ春の星 京都 安原 葉
 駅弁は筍飯がよく売れて 同
 深は新見るから観るへ明易し 同
 裾野てふ大いなる闇秋涼し 東京 柴原保佳
 若きよりの文墨仲間破れ傘 同
 山盧こそ心のよるべホ句の秋 同
 霧もまた富士の裾野を走るかな 芦屋 黒川悦子
 リニユーアルしても露けき虚子山盧 同
 秋の夜を徹して虚子を語らばや 同

落し文巻ききれざりし思ひあり 東京 今井千鶴子
 野牡丹の色むらさきと言ひ切れず 同
 水に色もらひ鮮やか水中花 同
 秋雨の中に驟雨のあまたたび 榎原 稲岡 長
 富士蔵す夜霧虚ろな大きさを 同
 新涼を通り越したる山の冷 同
 一天に大手拵げて大文字 京都 粟津松彩子
 大文字より力あり左大 同
 鼠より鼠花火のすばしこく 同
 文月や警告のごと火星燃え 神戸 三村純也
 星の夜や少女メールを打ち続け 同
 梶の葉に書けぬ想ひもありぬべし 同
 崖残し捨身ヶ嶽といふ若葉 徳島 上崎暮潮
 うぐひすや讃岐は空の広き国 同
 白峰の大破風仰ぎ百千鳥 同
 海山の風の起伏に露涼し 東京 河野美奇
 源流の星に付け文落し文 同
 竹煮草今日は囁く風のなし 同
 ミンクの毛持ちて生れし毛虫あり 福山 竹下陶子
 城のあり百万本の薔薇のあり 同
 見舞へざる圭二思へば時鳥 同
 長かりし汗の一日を終へしこと 神戸 山田弘子
 百合の香にありてどこやら祝疲れ 同
 取戻す平常心の涼しけれ 同

雑詠句評（十月号より）

は医学が進んで昔は難しかった病気でも克服することが出来る。短夜という季節が明易い作者の思いを語っている。（汀子）

白山の表情尖り来し雪解 金沢 藤浦昭代

白山は、富士山、立山と共に、日本三霊山の一つである。標高二七〇二米の成層火山で、信仰や伝説で知られている。石川県にお住まいの作者にとつて、白山は身近に朝夕眺められるのである。雪深い国の冬は純白に覆われ、眠っていた山が、少しずつ表情が動きはじめ、今迄円い稜線が、雪解と共に何となく尖り始めたようにみえた。刻々と春の近づき気配をよるこび乍ら、霊山に対する真剣な写生の目が、神々しくも鋭く描き出され、潔くまとめられた秀句と思う。（芳子）

富士山、立山と共に霊山の一つである白山は石川県と岐阜県にまたがる成層火山で主峰は二千七百二米とある。冬は雪に閉ざされ、春の雪解には荒々しい尖った山の表情となるのである。雪解の春が待たれるその地の人々の目に白山らしい表情が現れて懐かしい作者である。（汀子）

短夜やわが生涯の病魔見し 下関 松本圭二

生涯の病魔とは、言い変えれば持病であろうが、この句はその持病が、たまたま夏の短夜に発病したというのである。

短夜と聞くと、何故かゆつくり休息も出来ない様な感じもするが、その様な場面にも持病といったものは、やはり時を構わず現われるものであろう。

しかし持病を、生涯の病魔という厳しい認識で対処する、作者の健康管理といったものも充分に伝わってくる句である。

（忠彦）

歯科医である作者にとつて、この病魔とはどのようなものであろうか。医師であるが故に病魔と対決して治療の先端を駆使しておられるのであろう。どんな人であろうと生身の人間である。今

（以下略）

若水集

廣太郎選

天の川・残暑

水の星数多あらむや天の川 鹿兒島 青野迦葉
 さざめきは十二音階天の川 同
 大銀河天の川あり地球あり 同
 結ばれぬゆゑにはかなき天の川 橋本 塩崎万規子
 天の川果つる夜明けでありしかな 同
 アスファルト焦げるにほひの残暑かな 同
 天の川戦敗れて濃かりけり 熊本 荒牧成子
 銀河より照明弾の降りたる日 同
 短剣に懾れもせし天の川 同
 天の川年尾星へと喜美子星 富喜 加藤晴子
 天の川過去美しときらきらと 同
 天の川ちよつと広がりすぎてきし 同
 天の川見しか知覧の特攻機 北九州 本村照香
 銀漢の流るる果てに逝きしとや 同
 銀河はやその絶筆の美し哀し 同
 空の闇二つに分けて銀河かな 神戸 田中由子
 銀河濃し羊眠れる草原に 同
 銀漢や馬頭琴聞く膝を抱き 同

真夜中の銀河まざまざ嵐去る 静岡 鷲巢ふじ子
 白鳥座つばさを拡げ天の川 同
 句ごころを遠くにしたる残暑かな 同
 虚子在す西方銀河濃きところ 松阪 濱口秀村
 特攻に果てし魂とも濃き銀河 同
 岸離れ残暑脱ぎゆく島渡舟 同
 銀河濃く人には禱る心あり 大阪 蔦三郎
 銀河とは何や光年とは何や 同
 銀河濃く地球に人のひしめける 同
 大寺の屋根に残暑のありにけり 京都 山崎貴子
 天の川都会の空は区切られて 同
 入院の娘にリハビリと残暑あり 同
 踏切の長き警鐘 秋暑し 奈良 植木長子
 高原の森閑として天の川 同
 み吉野の深き奈落や天の川 同
 銀漢や刻の流れにきらめきて 東京 吉田小幸
 変りゆく世相を憂ひ天の川 同
 銀漢や常に句心旅ごゝろ 同
 天の川夜汽車に乗つて渡りゆく 神戸 藤井啓子
 天の川經由パリ行き直行便 同
 またしても月曜が来る残暑かな 同
 嬰兒に泣かれ残暑の腕かな 鳥取 岡田順子
 子に吾に岐路のいくたび銀河濃し 同
 明日は発つ身を銀漢に晒したる 同

若水集句評 廣太郎

水の星数多あらむや天の川 鹿見島 青野迦葉

地球の事をよく「水惑星」と称している事は周知の通りであるが、広い宇宙には果たしてこのような惑星がいくつあり、生命が存在しているのだろうか。「天の川」という星の集合体を見るにつけ、ふとそんな事を考えるのは作者だけではあるまい。限りないロマンを秘めた情深い句である。

アスファルト焦げるにほひの残暑かな 橋本 塩崎万規子

都会ならではの現象かも知れないが、日差しが強いと、アスファルトで出来た道路からは異様な匂いが立ち上ってくる。特に夏が過ぎ「残暑」の頃は歩いていても道が何か溶けて柔らかいような気がする。少し強烈な表現ではあるが、正に季節の様子を的確に捉えている。

天の川年尾星へと喜美子星 寧吉田 加藤晴子

私事で恐縮であるが、言うまでもなく今年二月二十日に亡くな

った祖母高濱喜美である。昨年リニューアルした山中湖の虚子山荘を長年守って下さり、筆者よりも高濱家とは縁が深いのではないかと思われる作者ならではの愛情深い表現が神秘的な季節を見事に詠んでいる。

句ごころを遠くにしたる残暑かな 静岡 鷺巣ふじ子

歳時記を見ると確かに八月は季節が比較的少ない。といってそれだけ俳句を作る機会が少ないわけでもないのだが、やはりこの季節「残暑」が厳しければ、何をするのにもなかなか意欲も湧いてこない。俳人ならではの表現とも言えるが、心の奥底では反対に意欲もより一層あるのだろう。

虚子在不す西方銀河濃きところ 松阪 濱口秀村

虚子の『六百五十句』昭和二十四年七月二十三日の一連の名句を彷彿とさせる。俳人である作者が正に「銀河」を目の当たりにしている光景が、読者にもダイナミックに伝わってくる。紹介する迄もないが、この日の虚子の「虚子一人銀河と共に西へ行く」「西方の浄土は銀河落るところ」が合体したような迫力も感じる事が出来る句である。